

出会い、そして出版に至るまで —台湾研究と私

公立大学法人名桜大学国際学群専任講師

菅野 敦志

第三三回発展途上国研究奨励賞は菅野敦志氏（名桜大学国際学群専任講師）の著になる

『台湾の国家と文化—「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』が受賞した。
表彰式に続いて菅野氏の受賞記念講演が行われた。



今回、名誉ある賞に選定していただきましたことに心から感謝を申し上げます。また、アジア経済研究所および選考委員会、そして、お忙しいなか会場に足を運んでくださった皆さまに対しても、心より御礼申し上げます。本日は「出会い、そして出版に至るまで」、副題として「台湾研究と私」ということで、私がこれまでどのような経緯で台湾研究と出会うことになったのか、というところからお話させていたいただきたいと思います。

●初めての留学は二歳の時、アメリカへ

今回賞を頂いた文化政策篇の『台湾の国家と文化』は二〇一一年一月に、言語政策篇の『台湾の言語と文字』は二〇一二年の二月に出版されました。これらは、博士論文に新しい論考を加え、二冊に分けて勁草書房から刊行したものです。

まず、今回の受賞作である一冊目が出るまでのいきさつや研究の内容について、私の生い立ち、そして、台湾との出会いからお話したいと思います。

一九七五年に私は山形県米沢市という東北の雪深いところで生まれました。サラリーマンの父はエ

ンジニアでしたが、祖父母は小学校の教員を、母も高校の教員をしており、教員の多い一家でした。平凡な家庭に生まれ育ちましたが、海外に対する興味は人一倍強く、最初の留学経験となったのが一一歳のときの一年間の単身アメリカ留学でした。

実はこれには前例がありません。私の町に、父親に行けといわれて小学校四年ぐらいたったときに一年間アメリカに単身留学させられた男の子がいました。スパルタ教育で父親に無理やり行かされたのですが、私は彼の帰国後の話を聞いて、「面白そうだな、行きたいな」と思いました。それで、親に「行きたい」といいましたら、なぜか行けることになりました。

一九八六年に一年間、アメリカのワシントン州にある、マーサー・アイランドというシアトルの隣町にホームステイをしたことが私にとって最初の海外経験でしたが、その時点ではまだ台湾とのご縁はありませんでした。

日本に戻った後は米沢の中学校を卒業しましたが、将来的にアメリカの大学に進学したいという気持ちが高まり、どのみちアメリカの大学に進学するのであればと思

い、高校で再渡米をいたしました。場所は、以前留学したところに近しいシアトルの高校にしました。

米沢出身の私は、幼いころから「為せば成る 為さねば成らぬ 何事も」と教えられて育ちました。実は、大事なところは次の「成らぬは人の為さぬなりけり」なのですが、それを聞かされて育ったおかげで、やれることがあればとにかく行動あるのみという気持ちで留学したわけです。ところが、

一年が過ぎるころ、別の高校に転校したいと思うようになりまし。当初は、アメリカでの留学しか考えておりませんでしたので、転校するにしても、アメリカ国内での転校しか頭にありませんでした。しかしそのとき、台湾行きの話が出てきたのです。といいますのも、私が再渡米をする一カ月前、

技術提携を結んでいた台湾の企業に父親が意向を命ぜられ、私がアメリカに行くよりも早く台湾に渡っていたからです。父親が台湾にいることを高校の日本人の先輩に何気なく話したのですが、するとその先輩は、「転校を考えているのであれば、台湾のアメリカンスクールやインターナショナルス

クールは？」とアドバイスをしてくれたのです。私の頭の中にはアメリカの高校しかなかったため、そのような選択肢があったのかと驚かされたのを覚えています。今思えば、そのときの先輩のアドバイスが私の進路を一八〇度転換させたのでした。

一九九一年の夏、私は台湾のことを何も知らないままアメリカから台湾へと渡り、台北アメリカンスクールに二年間通うことになりました。

●台湾への進路変更

一九九一年から九三年まで、私は台北アメリカンスクールで高校生活を送ることになりました。日本以外のアジアの国に行くのは私にとって初めての経験でしたので、何もかもが刺激的で楽しい毎日でした。

アメリカンスクールでは驚かされたことがいろいろありました。が、なかでも国・国籍に対する概念、将来の進路に対する考え方が、日本人とは全く違っていたことに驚きました。アメリカンスクールは、中華民国籍だけでは入学できない規定があったため、子どもをあえてアメリカやカナダで産んだ

り、中南米の国々で国籍を買ったりしてアメリカンスクールへ通わせる裕福な家庭の子弟が多く在籍していました。彼らにとって国籍の重要性は、その利便性にありました。そして、国際学校は彼らにとって「保険」のような位置づけでもありました。将来、中国との間で万が一有事が生じた場合に台湾からいつでも逃げられるように、海外に逃げ場を作るための「保険」として国際学校が存在していることに気付かされました。

当初、日本人である自分にとってよく分からなかったのは、中華民国、台湾をめぐるアイデンティティーの複雑さでした。また、日本統治時代から台湾に住む本省人と、一九四五年以後、特に四九年に国民党と一緒に渡ってきた外省人の複雑な歴史的背景や過去の対立関係、そしてまた、そのことによる、自分たちが何人であるのかというアイデンティティーの違いというものに対して、私は戸惑いを覚えずにいられませんでした。

例えば、最初に自己紹介をされる時、同年代の友達が自分を中国人と言ったり、台湾人と言ったりと、答えがまちまちであったこ

とです。確かに私も日本人であり、山形県人ではあるのですが、台湾人であることから、中国人であることを排除しなければいけない要因について、どうしてそうなるのか理解し難いものがありました。やがて、台湾の歴史を知ることです。その疑問は解けていったのですが、そもそも、このような複雑な歴史的背景を旧植民者の後裔である日本人の私が全くもって知らなかったということは、一六歳の私にとって大きな衝撃でした。

台湾の年配の方々が日本に対して非常に好意的で、植民地統治を受けていながらどうしてこのような親密な態度になるのかということも、当時の若い私にとっては非常に不可思議な現象として映りました。しかし、それも後々歴史を知ることです。以前、アメリカの高校で、台湾からの留学生が私や他の日本人学生に対して好意的であった謎もやっとなんと解けたような気がしました。

●台湾研究の

きっかけとなったひとこと

高校二年生だった当時の私にとって、後に台湾研究を志すきつ

かけとなったひと言がありました。それは、二人の同年代の台湾の友人から発せられたひと言でした。ひとつ目は、「日本人は台湾のことをどれくらい知っているの？」という何気ない問いでした。正直に「よく知らないし、若い人はあまり関心がない」といつて落胆させるべきか、それとも、「興味があるし、いろいろと知っている」と事実を繕うことで相手を喜ばせ満足させるべきか。答えるまでの一瞬の間でしたが、返答する際、非常に大きな心理的葛藤を覚えたことを、今でも強く覚えています。

二つ目は、兵役に行く直前の友人から、「僕も日本人だったらよかった」といわれたひと言がありました。これは、公園で二人だけで話していたときにぼつんといわれたのですが、彼は外省系の家庭に生まれた友人でした。外省人の子に「自分も日本人だったらよかった」といわしめる背景とは一体何なのだろうと、そのときとても複雑な気持ちになりました。こうした友人から発せられた二つのひと言が、後に私を台湾研究に向かわせるきっかけとなったように感じています。

来台当初、私は高校を卒業したらアメリカの大学に進学するつもりでいました。しかし、こうした台湾の友人との交流を経て、台湾と日本、日本とアジアの関係について知りたい、という気持ちに変わりました。そして日本の大学に戻ろうと決めたのですが、そのときに、私たちは日常的に情報の大半をマスメディアから得ているといえますが、台湾やアジアの情報を日本のマスメディアはどのように報じているのか、マスメディアから日本とアジアの関係性を考えてみたいという問題意識が芽生え、上智大学文学部新聞学科に入学しました。

上智大学在学中には香港中文大
学への交換留学も果たしました。
留学したのは一九九五〜九六年の
一年間でしたが、九七年の香港返
還直前で、変化に富み躍動的で面
白い時期でした。

● 中華文化復興運動を 研究の中心に

香港では、国民党村と呼ばれる
調景嶺、Tiu Keng Lengと広東語
で言いますが、国民党の旗がたく
さんなびいているブラック村がま
だ残っていた時期でした。台湾、

香港、そして留学中に中国にも足
を運んだことで、兩岸三地を自分
の目でみることでできましたが、
本書の基底となるような考え方や
発想は、台湾一カ所だけではなく、
こうした中華世界の各地での経験
を通じて養わせていただいたよう
に思います。

大学卒業後、いったんは新卒で
就職したのですが、やはり台湾研
究・アジア研究に対する気持ちを
ぬぐいきれず一年未満で退職し、
早稲田大学大学院アジア太平洋研
究科に入学しました。

一九九八年に開設されたばかり
のこの新しい研究科で、私は第二
期生として入学し、後藤乾一先生
のご指導のもと、修士論文、博士
論文を書き上げました。今回選定
していただいた本の核心となる研
究は、すでに修士課程のときに大
枠となるような骨格ができあがっ
ていました。

その研究の中心部分となるもの
が、一九六六年から台湾で開始さ
れた中華文化復興運動という運動
です。これは、大陸で一九六六年
から文化大革命が起り、中華文
化が破壊されているのに対して、
台湾は中華文化を復興し、保全し
なければいけないとして蒋介石が

開始した運動で、その運動を修士
論文の研究テーマとしてとりあげ
ました。台湾には修士・博士課程
で各半年間研究留学をしましたが、
そのときに出会ったのがこの
テーマでした。

文化大革命に関する書籍や研究
は日本国内でも数多く刊行されて
きた一方で、台湾の中華文化復興
運動に関する研究は皆無に等しい
状況でした。私は、蒋介石による
その運動がいかなるものであった
のか、また、台湾の人々にどのよ
うな意味を与えるものであったの
かという点に興味を覚え、修士論
文のテーマとしました。

私にとって非常に幸運だったの
は、当時蒋介石によって組織され
た文化復興運動の推進機構である
中華文化復興運動推行委員会の後
身となる中華文化復興運動総会
(現：中華文化総会)という組織
が当時の史料を保管していたので
すが、その史料閲覧を許可してい
ただけたことです。この史料閲覧
が許されなければ、私は今日、こ
の場でお話をさせていたたくこと
もなかったかもしれません。それ
が二〇〇〇年冬のことでした。

●資料庫での調査仲間

台北の重慶南路には今もかつての委員会の建物が建っており、私が収集活動をしたのは二〇〇〇年の冬から春にかけてでしたが、中華文化復興総会の史料庫には当時の史料が山積みになされていました。特に、一九九九年に台湾で九二一大地震が起こった際に、史料庫の蔵書が崩れ落ちてしまい、その後も無造作に放置されたままになっておりました。清潔とは言いがたい史料庫のなかで、史料収集の傍ら、地震で崩れた史料の再整理も併せてさせていただきました。

私にとってもうひとつの幸運は、史料閲覧の申請に訪れた際に、偶然にも同じ研究テーマで閲覧申請に来ていた国立政治大学の大学院生の林果顕君と知り合えたことでした。史料の収集と整理を共同で作業できたことは、お互いにとって大きな助けとなったと同時に、一生の戦友も得ることができました。

現在、彼は母校の政治大学で助理教授として奉職され、私は昨年からは沖繩の大学で職を得ることができました。一二年前の当時は、お互いの先行きを案じつつ、慰め、

励まし合いながら史料収集に励んでおりました。そのような雑談を交わしながら作業に没頭していた日々を昨日のこのように思い出します。

史料収集作業を行うに当たっては、一人の大きな理解者の存在もありました。現在、台北の銘伝大学にいらっしゃる黄淑芬先生は千葉大学で博士号を取得されて台湾に戻られた方で、その当時、中華文化復興運動総会と兼任でお仕事をされていました。日本で博士号を取得された黄先生は、私たちを暖かくご支援くださいました。今日の私の受賞も、こうしたご支援の賜物であると思います。

●大きな発見

多くの方々の助けをいただいた修士論文は、「戦後台湾の文化政策と中華文化復興運動に関する一考察—一九六六—一九八一—」というタイトルでアジア太平洋研究科に提出いたしました。これは本書の第三章に当たる部分になりますが、ここで私が論じたのは、国民党政権による上からの国民化というものが中国大陸時代からの連続性を持った政策であったことでした。とりわけ、大陸で行われた

新生活運動の再現のような運動からは、国民党政権・蒋介石による文化政策の連続性、一貫性が見受けられました。それ以外にも、蒋介石と息子の蔣経国の文化政策には違いがあったということも、修士論文を完成させるに当たって得られた大きな発見のひとつでした。

ここでは「台湾化の兆し」と書きましたが、蒋介石が中国伝統文化・倫理文化を中心とした文化復興運動を展開させたのに対して、蔣経国は台湾籍政治家の抜擢という政治的な台湾化と連動させた形で文化的な台湾化も行っていたのです。そういう予兆が、文化復興運動を追う過程でみえてきました。この発見は、私にとって意義深いものでした。結局、それが博士論文、そして本書の中心的なテーマへと結びついていったからです。

修士論文の提出後は博士課程に進学し、二〇〇七年一月に博士課程を修了いたしました。博士論文では、一九四五〜八七年というところで、先ほどご説明いただいたように戒厳令解除までの時期を扱い、「脱日本化」・「中国化」・「本土化」というキーワードを用いつ、

言語政策を文化政策のなかに組み込んだ形で、広く文化政策を政治的・歴史的に検証いたしました。

この博士論文は、最終的に文化政策篇、言語政策篇の二冊に分けて出版させていただいたわけですが、同分野の先駆的な先行研究としては愛知大学の黄英哲先生による『台湾文化再構築の光と影』をあげることができません。ほかに、国立台北教育大学の何義麟先生の『二・二八事件』も重要な先行研究になりますが、ひとつ言えるのは、現代台湾研究では経済・政治の分野で比較的多くの先行研究が出てきていたものの、文化を扱った研究は非常に少なかったということです。

黄英哲先生や何義麟先生の研究にしろ、それらは戦後初期を扱った著作・研究であり、戦後の国民党の文化施策に関する著作・研究は量的に少ないままでした。そうした研究の空白期があり、それを感じたことが、一九四五〜八七年までの文化政策や言語政策をテーマとするうえで大きな動機になりました。

先ほど長田先生からいただいた講評のなかで、先行研究について、下からの動きに対する言及も欲しかったとのこと指摘がございました。これについては、博士論文を基にしてアメリカで出版されたものや、Hsiau, A-chin（蕭阿勤）という、現在、台湾の中央研究院で研究員を務めておられる先生が、現代台湾の文化ナショナルリズムに関する研究を『Contemporary Taiwanese Cultural Nationalism』というタイトルで出版されております。私の著書の序文でも、蕭先生の研究が民からの側面を中心に扱われているので、私はそれに対して官による側面を中心に検証させていただいたとひと言お断りを入れております。もしその下からの動きについてご興味がおありになる方がいらっしゃいましたら、ぜひ蕭先生の研究をご参照いただければと思います。

●日本人研究者が台湾を研究する意義

私が研究を進めていくに当たって、ひとつ気にして進めていたポイントがあります。それは、日本人研究者として台湾研究を行うことでどのような貢献ができるの

か」という点です。といいますのも、ご存じのとおり、台湾では戒厳令解除以後、統一／独立をめぐるイデオロギー論争が現在に至るまで続いています。そしてまた、学術研究というのは政治と一歩距離を置く、引いた形で行うべきところですが、どうしてもそこから離れられないという難しい現実も台湾にはあります。そうしたなか、日本人研究者として台湾研究を行うことでどのような貢献が果たしうるのかを考えた場合、やはり政治的なイデオロギーから離れて研究に取り組むことによって可能になるのではないかと思えました。

国民党の一九八七年までの統治は、政治的・文化的な統制が厳しい抑圧状況が強調されがちであったといえます。確かにそれは間違いないのですが、負の側面が強調されることで実際の台湾社会の変化を見落としてしまう危険性も孕んでいるのではないかと思えました。それが、最終的に私の博士論文、そしてこの本書の根底の問題意識としてありました。日本人研究者として、台湾の統一／独立イデオロギーから離れたところで何か貢献できないかという気持ち、それが私の研究のなかで非常

に気に掛けた部分でした。

先ほどの講評でご説明いただきましたが、本研究は四つの時代区分に分けてあります。繰り返しになりますが、ここででは省略させていただきますが、修士論文が基になっている第三章が最初に完成した部分でした。しかし、日本との関係を扱った第一章や第二章においてもさまざまな発見がありました。日本の統治を離れた後も、日本の影響が残るなかで、台湾人が外省人とのような関係にあったのかを知るうえで、私自身も非常に勉強になった部分でした。そして、最後の第四章は著作のなかでも最も重要な部分ではないかと思えますが、これまでの蒋介石式の国民党文化政策を新たに方向転換させた蔣経国の「文化建設」という文化政策の意義について指摘をいたしました。

●台湾の脱日本化・中国化・本土化とは

ここで本書のキーワードである「脱日本化」・「中国化」・「本土化」を挙げて要点を説明させていただきます。まず、「脱日本化」の部分ですが、ここで私が意識した点は、台湾人の主体性でした。そし

て、調べていく過程で、ひとつの興味深い事実を発見することができました。それが、中国初の「九年制義務教育」計画です。

日本統治時代、台湾の児童は国民学校の高等科に通うことになっており、六年間の後に、二年間の職業教育を受ける機会が設けられていました。それが戦後、中国の学制に戻ったときに、中国の学制では義務教育は六年間ということで、その二年間が切り捨てられてしまいます。その切り捨てられた二年間に対して、台湾人は、自分たちの教育を退化させたくない、むしろ日本と比肩し得る教育制度にしたいということで、就学率が最も高い台北市に限定して九年間の義務教育計画を打ち出しました。この計画は一九四七年に浮上し、大きく注目を集めたのは四八年のことでした。

この計画で特徴的だったのは、中国の教育改革を牽引する存在としての、主体性を持った戦後初期の台湾像でした。しかしこの計画は、最終的に中央政府によって却下されてしまいます。実施される寸前のところまでいった同計画でしたが、国共内戦で国民党の敗退が現実味を帯び、台湾が国民党の

逃亡先として選択肢に浮上するなかで、莫大な予算を必要とするこの計画は却下されてしまったわけだ。

結局、兩岸の分断もあり、後に双方の教育史から同計画の存在は忘却されてしまうのですが、ここからみえてくるのは、日本をめぐる近代化と奴隷化のせめぎ合いでした。本省人にとって、日本の遺産は近代化遺産であったのに対し、少なからぬ外省人の目には、そうした日本の遺産は異民族による奴隷化教育という「日抛時代」の遺物として映るものであった。そこに現実の日本が介在せずとも、日本をめぐる記憶を介して、台湾の文化的な脱植民地化というものが大きく影響を受けてきたのだということが、脱日本化について検証した際に印象的でした。また同時に、この脱日本化というキーワードをあげた際に、それ以上からの脱日本化というだけでなく、やはりそこに台湾人の主体的な脱日本化が欠落していたからこそ、戦後台湾における文化的状況の複雑性というものが生み出されたのではないか、という思いを新たにしました。

二番目にキーワードとして挙げ

た「中国化」ですが、中国化については、中華文化復興運動を通じてさまざまなことがみえてきました。先ほども申し上げましたが、

蒋介石による中国化の集大成としての中華文化復興運動というのは、台湾で初めて実施されたものではなく、大陸時代の新生活運動といった過去の実践が、最終的に台湾で完成版として実施された側面がありました。例えば、この中華文化復興運動では、大陸時代からの一貫性として、かつて国民党の教育文化政策で中心的な地位にあった陳立夫が副会長として大きな役割を担うなど、国民党・蒋介石の文化政策の非常に特徴的な部分が見られていました。こうしたことから、現代台湾研究というのは、台湾だけではなく、中国近現代史の文脈のなかで全体像がみえてくることを改めて確認いたしました。

●本土化⇔台湾化

これらの「脱日本化」・「中国化」に続く、最後のキーワードとして「本土化」があります。この「本土化」は中国語で、日本語でいえば「台湾化」ということになりませんが、ひと言でいえば、伝統文化

から地方文化へと重点のシフトが行われたということです。そもそも、国民党・蒋介石にとっての中国化とは、伝統倫理文化、道徳文化の復興が非常に中心的な位置を占めていたのですが、一方、その

後の蔣経国の文化政策では、芸術文化なども含む現代的な文化政策への移行がみられるようになりました。蒋介石時代の文化政策の中心的な思想というのは、孔孟思想であったと思いますが、それが何であったかといいますが、やはり「国家に命をささげる、身をささげる」という愛国精神が、国民党統治を行ううえで中心的な思想として上から注入され続けてきたということであり、そうしたことが研究を続けていくなかでみえてきました。

例えば、「殺身成仁（身を殺して仁を成す）」であるとか「捨身取義（命を捨てて大義に生きる）」といった文言が、教育政策や文化政策を通じて上から注入されようとしていた姿がみえてきました。

中華文化復興運動などでも国劇（京劇）は盛んに奨励されていたわけですが、それは伝統的な舞台芸術の奨励という側面だけでなく、国劇のなかに入れ込められて

いる道徳的価値の教化という側面が重要であったということ、そうしたことが蒋介石時代の文化復興運動・文化政策に非常に特徴的だったことがわかりました。

しかし、その後の蔣経国時代の文化政策では大きな変化が生じることになりました。それまで中心的な文化政策の陰に隠されてきた、あるいは脇に置かれ続けてきた民俗文化を中心的な国民文化へ止揚させるという動きが変わっていったのです。例えば、台湾籍の台湾研究者である陳奇祿を抜擢して、台湾の民俗文化の上演や展示を行ったり、都市だけではなく台湾の各地方にも大規模な文化施設を建設したりしていったのです。これらの処置には、台湾における国民党統治に対する支持を高める狙いが背後にあったと考えられるとはいえず、蒋介石時代の、教条的な道徳観念を教え込む画一的な文化政策からの転換を物語るものであったと思います。

そして、取りも直さずこの重要性というのは、一九八七年後の李登輝時代で本格的に進められていった「本土化」（台湾化）への伏線となったことです。こうした蔣経国による転換があったからこ

そ、李登輝時代の大きな本土化の流れが可能になったということであつたかと思えます。

これについては、以前台湾のテレビ番組で李登輝のインタビュをみたことがあるのですが、「蔣経国先生による本土化があつたからこそ、その後も本土化を進めることができた」と李登輝自身もはっきりと述べていました。蔣経国時代の転換を正当性の根拠として、李登輝時代の本土化が可能になったという、この蔣経国時代の意義を本書の最後で指摘させていただきます。

私自身、これまで多くの先達の先生方の研究を参考にさせていただくことで自身の研究を進めることができたわけですが、出版に際しては、戦後台湾の文化政策・言語政策をできるだけ通史的な形にまとめ、事典のような形で参照できる有用な書物として刊行したいという気持ちがありました。編集作業で多くの手助けをいただいた勁草書房の永田悠一さんにはこの場を借りて御礼を申し上げます。

最後に、これまでの研究で私が最も重きを置いてきた点、それは、絶えず変化する他者を理解することの大切さです。台湾という存在

自体はそれほど大きくはないかもしれませんが、重層性に富む社会で暮らす人々が経てきたさまざまな変化を、私たちはつい見落としがちです。この著書で一九四五〜八七年までを扱った理由のひとつには、変化の只中にある他者の現在の姿だけでなく、これまで変化・変容してきた他者の過去に目を向けてこそ、そうした今の他者を知ることができないのではないかと、そのような気持ちを根底に据えながら研究を行ってきたことを、最後に述べさせていたただきたいと思えます。

私は昨年四月から、沖縄県名護市にある名桜大学というところでお仕事をさせていただいております。学生と台湾について、そしてアジアについて議論するときには、お互いの周辺性からくる共通性ということを考えてみよう、と投げかけています。

私が沖縄で台湾について考え、研究する機会に恵まれたことには不思議なご縁を感じておりますが、それは偶然であり、また必然であつたような気がします。沖縄の学生は、自分たちの島の歴史

と台湾の歴史との間に多くの共通点があることを知ると親近感を覚えるようで、「一度台湾に行ってみたい、遊びに行ってみたい」と言ってくれます。昨年何人かの学生を台湾に引率で連れて行きましたが、周辺に位置するからこそみえてくる互いの共通性という点からも、沖縄の学生にとつての台湾は、自分たちの姿を映し出す鏡のような他者であるという感慨を覚えています。

沖縄や台湾からみえてくるアジアの社会や世界は、中心からみえる世界とは全く異なるものであると思います。しかし、そうした周辺からみえる世界の見方や歴史、周辺からの視座こそが、これからアジアを考えていくうえでますます大切にされるべきではないかと、台湾研究に従事させていただいたことで、私個人としても改めて感じているところです。ご清聴どうもありがとうございました。

（講演日 二〇一二年七月二日於
ジエトロ本部5ABC会議室）